

昭和57年度
宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う

戸波遺跡発掘調査報告書

昭和58年3月

島根県八束郡八雲村教育委員会

例　　言

1. 本調査報告書は、「宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業」に伴い、松江農林事務所からの依頼を受け、昭和57年12月～翌年2月まで、八雲村教育委員会が調査した報告である。
2. 本調査は、八雲村教育委員会主事宮本徳昭を担当者として、島根大学学生房宗寿雄・曾田稔の補助を得て行い、事務局は八雲村教育委員会主事宮本が担当した。
3. 現場作業及び情況判断について、八雲村大字東岩坂川向地区の方々の多大なる御協力と御指導を賜った。
4. 遺物整理は、宮本・房宗・曾田・永島かをるが行った。
5. 本調査報告書の実測図・執筆・編集は宮本が行い、トレースは永島があたり、写真撮影は宮本・永島が、県立博物館学芸員村上勇氏の指導を得て行った。
6. 戸波遺跡とは、「戸波」という字名を有する中に「戸(外)波屋敷」・「觀音さん」・「井戸」・「若宮さん」と呼称されている区域があるため、この字名のはば全域を範囲とするものである。
7. 本調査は、県立博物館学芸員村上勇氏、県文化課埋蔵文化財第1係職員各氏をはじめ、八雲村文化財保護審議会長石倉諒一氏の多大なる御指導を賜った。

目 次

I 調査にいたった経緯とその背景.....	1
II 位置と環境	1
III 調査結果	6
1. 調査状況	6
屋敷跡	6
観音	7
井戸	8
若宮	9
2. 遺物	11
IV 結語	15
V 図版	

挿図目次

- 第1図 周辺の遺跡
（「八雲村の遺跡」追加） 2
第2図 発掘調査範囲図 3
第3図 観音土層実測図 7
第4図 井戸河原石検出実測図 8
第5図 井戸土層実測図 8
第6図 若宮地形実測図 10
第7図 若宮土層実測図 10
第8図 出土遺物実測図 12

図 版

- I 遺跡発掘前全景（北より）
遺跡発掘後全景（北より）
II 戸波屋敷発掘前（北より）
観音・若宮・井戸発掘前（北より）
III 現八雲保育園付近からの東岩坂要害山
(広報やくも 昭和44年9月号より)
戸波屋敷馬屋跡（南より）
IV 戸波屋敷馬屋跡及び築地跡（南より）
観音 遺構検出状況（東より）
V 観音 漆器検出状況1（東より）
観音 漆器検出状況2（東より）
VI 井戸 発掘前（南より）
井戸 表土除去後（東より）
VII 井戸 木組検出状況（東より）
若宮 伐採後（南より）
VIII 若宮 基段面検出状況（南より）
若宮 発掘後（南より）
IX 陶器・磁器
X 土師器・煙管

I 調査にいたった経緯とその背景

本発掘調査は、宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴うものとして、四次に亘るものである。

第一次は昭和53年度に古墳1基、第二次は昭和55年度に古墳4基、第三次は昭和56年度に古墳7基他^{註1}、第四次は本年度の中世屋敷跡伝承地である。この中第三次までは、土取場内の遺跡として、本年度は土地改良地内の遺跡であった。

昭和57年8月中旬、「宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業」の八雲村地元代表者より、八雲村教育委員会へ事前調査の申し入れがあった。これを受け、松江農林事務所と村教育委員会の協議に入り、合わせて県文化課の三者協議を行った。同年11月中旬正式に文書を取りかわし、同年12月21日に委託契約を行った。

現場調査は昭和57年12月21日から開始し、翌年2月4日まで本格的調査を実施して後、同年2月28日に補足調査を終了した。同年1月下旬から整理・報告書作成作業を行った。

註1 「季刊文化財」35号 「速報土井13号墳の発掘」内田律雄他 1979年

註2 「昭和55年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1981年

註3 「昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1982年

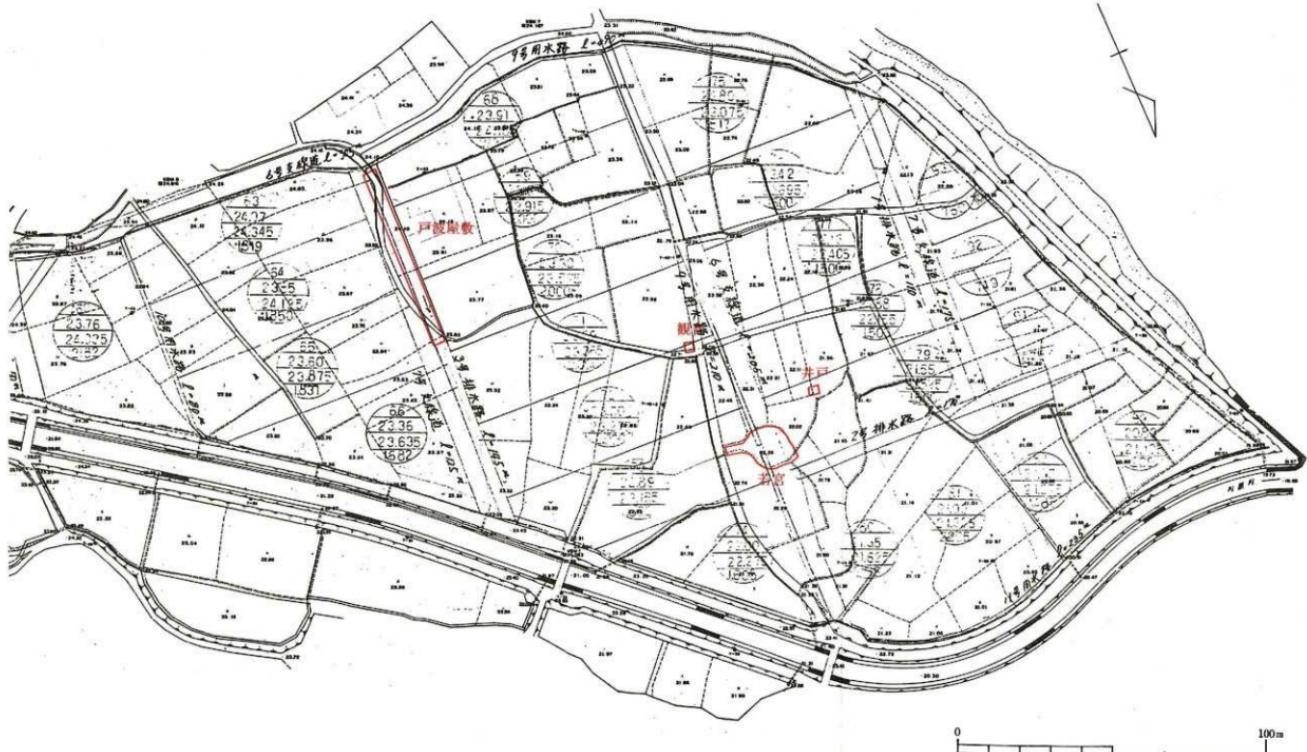
II 位置と環境

「宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業」に伴う発掘調査は第四次であり、古墳時代までの環境は既に述べているので、今回は古墳時代以降のことについて述べる。

本村は広瀬町と接し、宍道湖・中海との地理的環境から、中世特に戦国時代に関する伝承・遺物がある。近年の中世以降の考古学的関心もあり、本村でも各種



第1図 周辺の遺跡（「八雲村の道路」追加）



第2図 発掘調査範囲図

開発事業の分布調査に際し、砦、城跡、五輪塔の分布が確認されつつある。

今回調査対象となった地域は、「宇戸（外）波」という呼称である。民間伝承には、「屋敷跡」（昭和初期まで建物が存在）・「若宮さん」（明治初期毛社神社に合祀）・「鍵音さん」・「井戸」・「馬乗り場」等の呼称があった。『旧県史』に「去七月廿八日岩坂外波画所御敵數輩楯籠處令勢遣、……応仁二年十月廿日……」（印筆者）と出ている。以上のような点から、中世にさかのぼる遺跡の可能性があるという前提の下に調査に入った。

環境として、本遺跡の北側は東岩坂要害山城跡があり、南西の丘陵には五輪塔群^{註1}・その南の山に砦状地形、本遺跡の所在する平野の南西部に大石城址、意宇川上流部に熊野城址、広瀬へ通じる屋根上に砦状地形、各小河川沿いには五輪塔群（ほぼ同時期か）が点在している。

以上のように、本村は從来古墳時代を中心とした遺跡の宝庫とされていたが、詳細な分布調査等を実施していく中で、中世（戦国時代前後）の遺跡の増加及び重要な遺跡も予想される地域である。また村誌編さんも本格的に動き出し、村民からの情報提供が多くなり近世史にも大きな前進が予想される。

註1 「中山2号墳・中山五輪塔群」 八雲村教育委員会 1982年

III 調査結果

戸波遺跡の予想範囲約3,000m²の内、工事により破壊を受けると考えられる所及び伝承地を中心に4箇所を、発掘調査範囲として500m²を設定した。

以下4箇所の調査状況を個別に述べ、最後にまとめて遺物の項を設ける。

1. 調査状況

屋敷跡

水路設置に伴い、著しく表土及び床土以下を掘削する部分について、2.5m×60.0mの平面プランを発掘調査範囲とした。その後、現畦道部分に遺物が包含されていることがわかったため、現畦道部分のみ遺物収集の目的で調査を実施した。

耕作土10cm前後除去した結果、ほぼ1m間隔で6個・それに接して6個・その他7個の柱穴が検出された。その周囲には溝が巡っているようであり、柱穴と同時期と考えられた。発掘作業員から、昭和初期まで存在した馬屋跡であることが判明した。溝から検出された陶磁器からも、明治初期までさかのぼるものではなかった。

馬屋跡の床面を除去した後、3個の柱穴と考えられるものがあったが、性格は不明である。

その他、昭和初期まであった屋敷の土解と考えられる跡も検出された。

表土下20~30cm下げた後、遺物包含層がなかったため、トレーナーを表土下1m前後まで入れたが、氾濫原を呈していた。

遺物は、陶磁器・須恵器片が多数検出された。この中で注目される遺物としては、明代中頃の青磁片、初期の唐津焼等があった。この他に、江戸時代中頃以降の発掘調査が少ない関係から、この地方での陶磁器の在り方について価値のあるものがある。^{註1}

註1 県立博物館村上勇学芸員の御教示による。

観 音

現状は水田であり、「馬乗り場」と呼称される現農道に接している。もとはここだけ、畦により区画されていたようであるが、現在は1枚の水田となっており、もとの面積及び形状通り6.0×4.0mの長方形プランを発掘調査範囲とした。

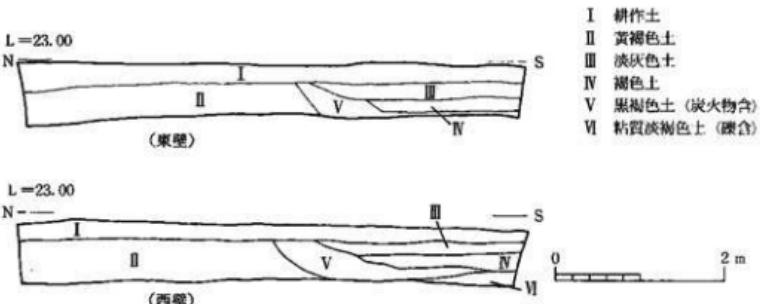
耕作土20cm前後除去した結果、南半分に土色変化があり遺構検出作業を行った。

表土下60cm前後に、河原石が一面に出て底と判断した(第3図参照)。底から第一層には、炭化物が多数混入しており、炭化物が棒状になっていることから、排水用に木・植物等を投げ入れたと推定した。しかし、底からやや浮いて、5個の椀状になった漆と1個の盤状になった漆が、それぞれ伏せた状態で検出された。盤状の物の周囲に3個の椀状の物、他の2個の椀状の物がやや離れて検出された。漆塗りの椀と盆と考えられるが、他に遺物がほとんどなく時代決定の判断材料がなかった。

また遺構面と工事計画面との間に破壊関係はなく、水田として残るということから拡張しなかったため、南端が不明で、また周囲の状況も把握していないため遺構の性格も不明である。遺物の検出状況から判断して、他から氾濫等により流れ来たものとは考えられず、ほぼ原位置に近いものと考えられ、2点の瓦片とも考えてみる必要があろう。

尚、底と考えた河原石面以下は、工事による掘削はないので発掘調査は進めなかつた。

註1 土地所有者及び発掘作業員より。

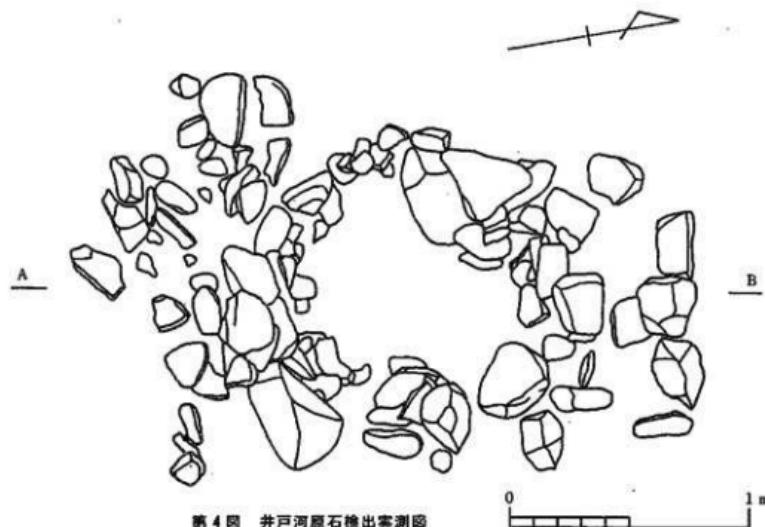


第3図 観音土層実測図

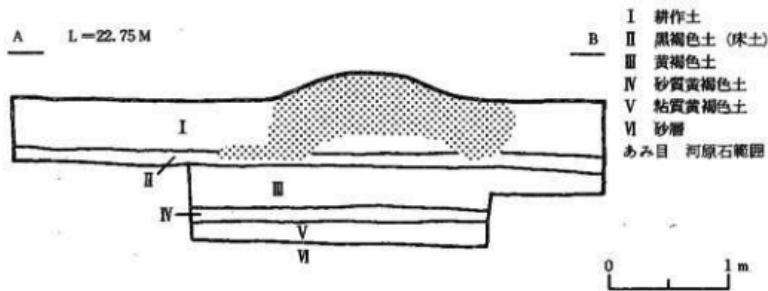
井 戸

畔に沿って高まりがあり、小木が1本立っていた。土地所有者に依れば、数年前まで祭祀をしており、水の出入りの激しい所で、昔から「井戸があり、蓋がしてある。」という伝承のある所であった。

発掘範囲を $4.0 \times 4.5\text{ m}$ とし、最も深い所で、 1.5 m まで調査した。床土面まで河原石があったが、中央部は橢円形に表土面から厚さ 60cm まで石があり、南は



第4図 井戸河原石検出実測図



第5図 井戸土層実測図

床上面に石敷状、北は床土面上50cmに3個があった。石は人頭大からその半分位の大きさであった。内径南北0.85×東西0.60m、高さ0.85m、外径1.50m、高さ0.70m、南石敷南北0.65×東西1.80mの検出規模だった。

遺物は陶磁器片数点・煙管雁首1・瓦片があった。この中に、17世紀代の伊万里焼の碗が検出された。

発掘の結果、明確な井戸と呼ばれる遺構はなかったが、付近の床土以下は水分の保ちがよいこと、さらにその下は湧水性があること、中央部に円形状に石がなかったこと等から、底まで石壁を造らず、地表面とほぼ同じ面から上に石壁を70cm前後造っていたと考えられる。この「字戸波」の北半分は、川原川の改修があるまでは保水性がよく、特にこの付近は湧水があったようで、後述する「若宮」も水に関係するものと考えられることから、井戸として誤りないであろう。

若宮

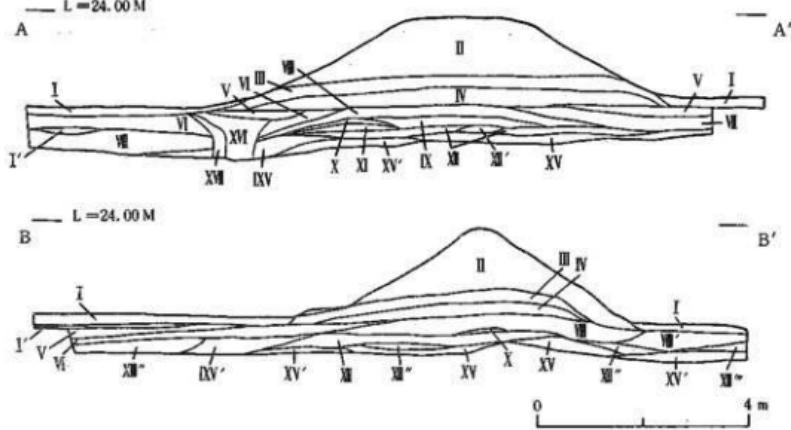
道路新設地に高さ1.75mの石積みがあり、それに椿の木（樹齢70年以上）が3本生い茂っていた。「若宮さん」と呼ばれ、明治初期頃に同じ東岩坂地内にある毛社神社へ、所有者であった小松氏（現東京都在住）より供物とともに宮社を預けられたものである。地籍及び地形は、「馬乗場」と呼ばれる道路より進入路が付き、椿円形の二重になり、杓子状になっており、旧状を保っていると考えられる。

石積みは河原石の人頭大を中心に1.1mの厚さで積み上げられ、椿の木3本が北西一南東に並んでいるため、その根（木）元に積み上げたようになっていた。椿の木の根がこの石積み層と下の土石層との間から出ていることから、宮社があつた頃ないし椿の木の生えはじめた頃は、現周囲耕作面より0.5m上の所であったと推定される。

土石層は同じく河原石の中に土が混入した程度のもので、25cmの厚さがあり、椿の木の根もこの中におろしていた。

土石層と礫層の間に細石粒層があり、これの中央部に凹地があったが、人工的なものか否かは不明である。

現耕作面以下の土層についてトレンチを入れた結果、3～4層にわたって礫が



I 耕作土	VI 粘質黃褐色土	XI 砂層	IXV 黃褐色土層
I' 旧水田床上	VII 硫層（上含）	XII 黑褐砂硫層	XV 淡黑色砂硫層
II 石腐	VIII 硫層	XIII 砂層	XV' 砂硫層（疊大）
III 土石層	VIII' 硫層（土含）	XIV 黑色砂硫層（土含）	XVI 砂質黑褐色土
IV 砂硫層	IX 砂硫層	XV 砂硫層	XVII 黑褐色土
V 砂質黃褐色土	X 黑色砂硫層	XVI 砂層	

第7図 若富土層実測図

焼けて黒くなっていることが判明した。また両側石積み裾部に、溝状のものが掘られた痕跡も判明した。

遺物は陶磁器・須恵器・土師器・瓦・石造物等があったが、大半は石積み屑の中から検出した。この中で特に注目されるものとしては、明代中頃の青磁碗片3点・同代白磁青花皿片1点・同代白磁皿1点・江戸時代初期の唐津焼3点等がある。また土師器壺口縁部で初期のもの1点を検出した。この他に窯等不明であるが、18世紀代後半の当地方における陶磁器の流通過程及び需要形態がわかるものとして重要である。

註1 小松俊郎氏の御教示による

2. 遺 物

当発掘調査では、土師器・陶磁器・漆器・瓦・須恵器細片が出土した。以下遺跡に関係するものの順に、陶磁器・漆器・煙管・土師器と述べておく。

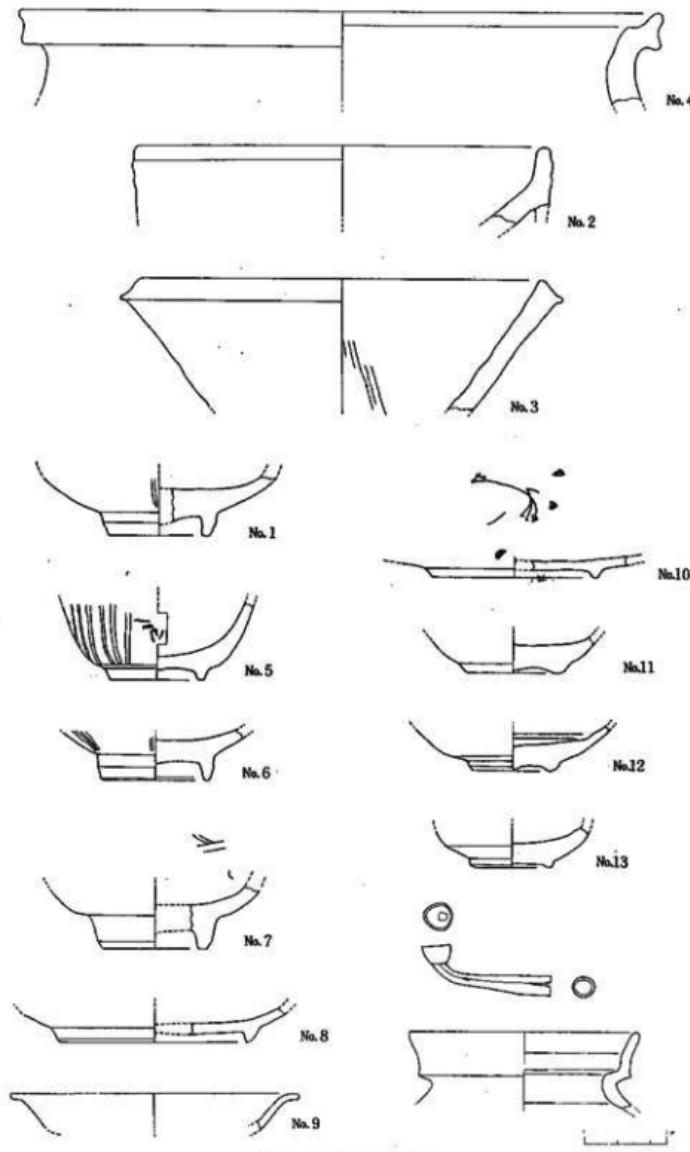
陶磁器 今回の発掘調査では、須恵器に次いで数多く検出され、遺構と関連するものであるが、特徴的なもののみ述べていく。

No 1、屋敷に接して北に伸びる現畦道敷から、青磁碗高台部1/3が検出された。表面に片切り彫りの簡便化した蓮弁文があり、内面は見込みに一条の沈線が廻っている。青磁釉は高台内側には及んでいない。高台の造りはやや不安定である。15世紀前半代の明の青磁蓮弁碗である。

No 2、屋敷に接して北に伸びる現畦道敷から、擂鉢の口縁の一部が検出された。口縁の条溝が発達していないもので、全体の器形は下端部が欠損しているため不明であるが、口縁の肥大化した時期のものである。胎土中に2mm大の砂粒を含んでいる。形態・胎土からみて、備前焼の擂鉢と考えられる。

No 3、屋敷に接して北に伸びる現畦道敷から、備前焼の擂鉢の口縁の一部が検出された。口縁部の外側はつまみ出されており、やや下方へ肥厚化している。内面は、口縁から4cm位のところから、5条以上1組の条溝が施されている。

No 4、屋敷に接して北に伸びる現畦道敷から、口縁の一部が検出された。口唇部は上と下につまみ出したようになっており、外側は外反し、内側は一段受け部がつき、いわゆるN字状口縁を呈している。形状・胎土等から常滑焼として誤り



第 8 図 出土遺物実測図

なかろう。

No.5、井戸河原石中から、高台から胴にかけての染付碗が検出された。外面を4等分し、それぞれ6本の丸彫線と「寿」という字を配している。全体にやや青味がかった釉がかかり、高台内及び一部高台回りに焼成時の砂粒が付着している。高台回りはヘラ削りがしてある。17世紀代の伊万里焼と考えられる。

No.6、若宮石層中から、青磁碗が検出された。No.1とほぼ似通っているが、器肉はやや薄く、見込みに片切り彫で表わされた一条の円圏がまわり、中に印花文が配されている。外側には同じく片切り彫りの文様がある。口縁部がかけているので全様は判然としないが、明代15世紀前半代のやや雑になった青磁蓮弁文碗であろう。

No.7、若宮石層中から、青磁碗の高台部分が検出された。No.1・No.6に比べ、全体の造りがしっかりしており高台も高い。外面は文様等見られないが、見込みに沈線による円圏があり、その外側に文様が施してあるが判然としない。釉は、他の青磁に比べやや明るく高台内側まで完全にかかっている。15世紀初め頃であろう。

他にもう1点しのぎ蓮弁文青磁碗の胴の一部が検出されているが、No.1・No.2に比べるとかなり整ったものと考えられる。

No.8、若宮石層中から、白磁皿が検出された。高台は、外側がゆるいカーブをえがく逆三角形である。疊付は、無釉になっており高台内側は砂粒が付着している。明代16世紀代のものであろう。

No.9、若宮石層中から、白磁皿の口縁部が検出された。No.8と同一個体と考えられる。No.8と同時代のものである。

No.10、若宮石層中から、白磁青花皿が検出された。高台は小さく低いが、高台径は大きい。内側に、淡く龍の足の部分が一筆で描かれている。16世紀から17世紀にかかる明の青花皿として誤りなかろう。

No.11、若宮石層中から、唐津皿が検出された。焼成はあまく、内面に半がけしてある釉がとけきっていない。高台は浅く削り出している。胎土は砂分の多いざんぐりしたもので、見込みに砂の目跡と考えられる痕跡がある。17世紀初めの唐津焼の碗であろう。

No.12、若宮石層中から、唐津焼の皿が検出された。胎土は鉄分を多く含んでいる。灰釉が薄緑色を呈しているが、見込みと高台内側を貫く「われ」がある。見

込みには重ね焼の砂目の跡があり、一部釉がはげている。高台回りはシャープに削っており、高台はいわゆる三日月高台である。17世紀前半代の製品である。

No13、若宮石層中から、唐津焼が検出された。焼成はゆるく、内面に灰白濁釉をかけているが、外面は高台脇以下には釉がかかっていない。高台は小さく、高台回りの削りは広い。見込みに小さな目跡がある。17世紀前半代の唐津焼であろう。

他に多くの陶磁器片が検出されているが、時代的には19世紀代のものが大半であり窯等不明である。

漆器 観音の耕作土下0.7m、河原石面からやや浮いた所から楕五口、盆一枚が検出されたが、ほとんど漆膜だけになっていた。下地に赤漆（ベンガラ？）を塗り、化粧として黒漆がみられた。盆は約径14cm・楕は約径11cm・高さ約8cmを測り得た。文様等は見られない。共伴遺物がなく、時期決定はできないが、おおむね江戸時代中頃までのものと考えられる。

煙管 井戸表土中から検出されたが、吹口や羅字は検出されなかった。火皿は、上からみると一辺を吹口側にした隅丸三角形を呈している。雁首部分は、一枚なり立上りが低く羅字に続く部分はやや長い。全体に素材はよくなく加工も雑である。時代は不明である。

土師器 若宮土石層から検出されたものである。風化が著しいため詳細な観察はできないが、胎土は淡い赤褐色を呈し、焼成はややゆるい。調整等は不明であるが、成形はていねいなものである。古墳時代前期のものであろう。

IV 結論

本発掘調査は、当初室町時代後半期の遺構を想定して入った。発掘調査の結果、遺物としては時代的に符合するものが10点ばかりあり、他の遺物は古墳時代、江戸時代初期と同後期にあたるものであった。遺構としては、井戸・祭祀跡と考えられるもの、性格不明のものが各1箇所検出された。

以下、発掘箇所毎に概要を述べておく。

屋敷跡は、昭和初期まであった建物の跡が検出されたが、その下からは遺構は検出されなかった。「戸波屋敷」と呼称されている中心部を発掘調査すれば、あるいは江戸時代後期までさかのぼる遺構が検出される可能性があるが、工事工程から遺構に影響がないと判断し、発掘調査はしなかった。遺物からみると、15世紀初め頃までさかのぼるものがあり、少なくとも15世紀後半には何らかの遺構ないし生活址があったと考えて誤りなかろう。

観音は、一部分の発掘調査であったため全体像は不明であり、性格不明のものが検出された。調査範囲の1/2の所から段差がついているが、低い方が遺構としての性格があるのか、高い方であるのか不明である。遺物は低い方から、瓦・漆器が出土した。遺物からみる限り、江戸時代後半期以降の段差と考えられる。調査範囲を拡張すれば、規模及び性格も判明したであろうが、工事工程から遺構に影響がないため、拡張による発掘調査は実施しなかった。

井戸は伝承どおり、井戸として誤りなかろう。立地をうまく利用し、地上に出ている部分だけに河原石を楕円形に積み上げ、踏み場に同じく河原石を長方形に敷くという簡単なものであった。遺物の上限は17世紀までさかのぼるが、他は19世紀代のものであり、19世紀代の遺構としてよかろう。

若宮は、周囲の畑面より高いところに隅丸方形の段があったと考えられ、その下は氾濫に遭い、さらにその下に火を使用する行為を四回以上した痕跡があった。段は、明治初期頃まであった「若宮さん」の床と考えられる。下層の焼石層については、トレンチが狭い範囲だったために遺物等も検出されず、年代決定の資料がない。性格も、立地及び断面図から推察すると水の出入の著しい所であり、断面図から推察すれば簡易井戸的作用をし、清い水が湧くと考えられ、何らかの

水に関する行為の跡とも考えられる程度である。この区域も工事工程から、下層の焼石層に影響がないため、全面掘り下げ等の発掘調査は実施しなかった。

以上遺構面から述べてきたが、遺物としては古墳時代のもの、室町時代後半のもの、江戸時代初期（一部中期）のもの、同じく後期のものがあった。分布状況は、屋敷地区は須恵器細片と陶磁器が耕作土及び現畦道敷で混在しているのに対して、他は陶磁器が主流をなしている。

このようなことから、「字戸波」の中央部に室町時代後半期頃から何らかの建物があり、江戸時代後半期に最も盛んに活動し、明治時代末に「戸波屋敷」を離れたと考えられる。

遺構的には、かなり不明な点があったが、遺物からみる時、村内で初めて出土したものばかりである。江戸時代後半期の陶磁器に関しては、今後の発掘調査の在り方を示唆するものであり、今後、伝承により残っている地名を充分に検討・把握していないと、近世後半期の未だ重要視されていないものが、次第にその姿を消し、今後の近世歴史学の不明部分になり得る可能性がある。

註1 P5参照

V 図 版

図版 I



遺跡発掘前全景（北より）



遺跡発掘後全景（北より）

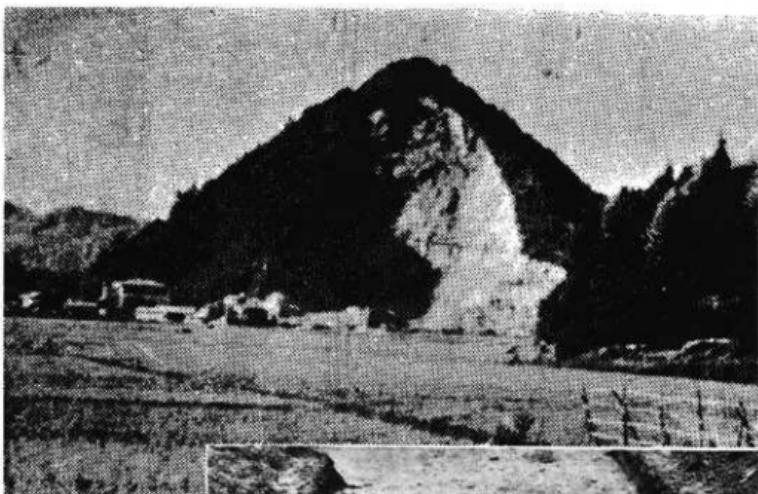
図版 II



戸波屋敷発掘前（北より）



観音・若宮・井戸発掘前（北より）

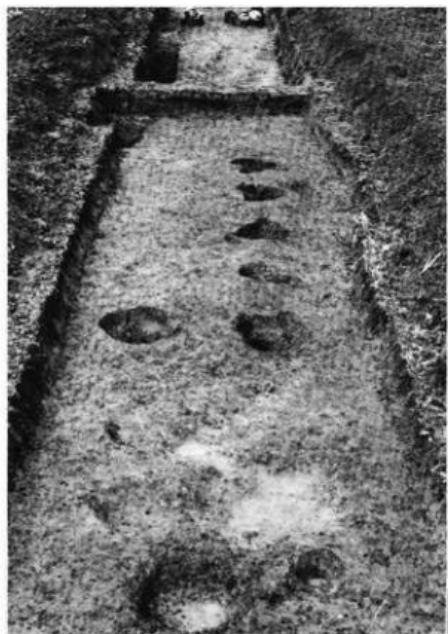


現八雲保育園付近か
らの東岩坂要害山
(広報やくも
昭和44年9月号
より)



戸波屋敷馬屋跡
(南より)

図版 IV



戸波屋敷
馬屋跡及び築地跡（南より）



観音 遺構検出状況（東より）



観音 漆器検出状況1（東より）



観音 漆器検出状況2（東より）

図版 VI



井戸 発掘前（南より）



井戸 表土除去後（東より）



井戸 枠組検出状況（東より）



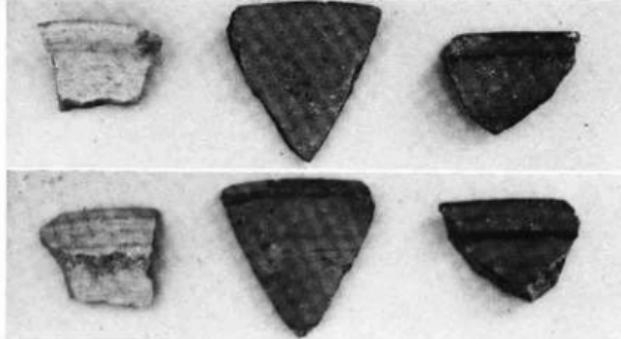
若宮 伐採後（南より）



若宮 基段面検出状況（南より）

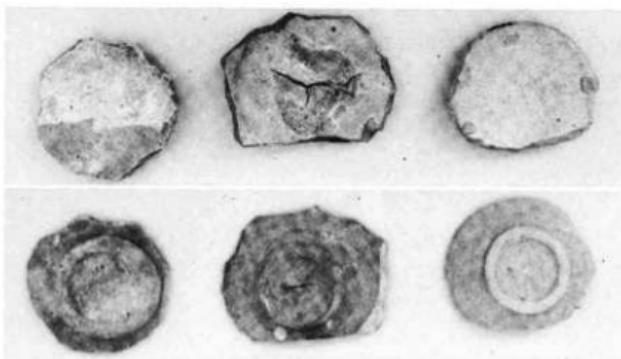


若宮 発掘後（南より）

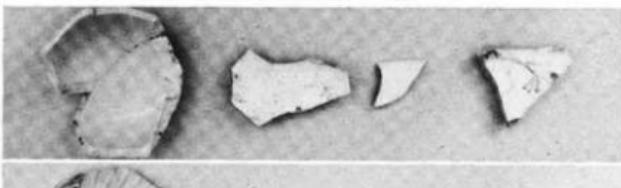
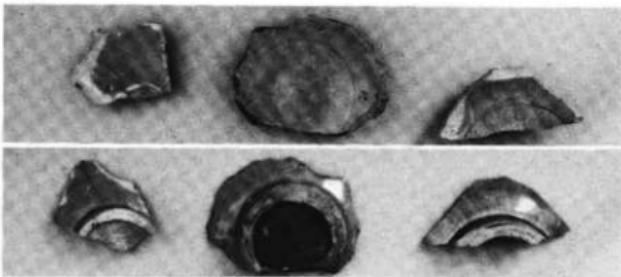


2 3 4
11 12 13

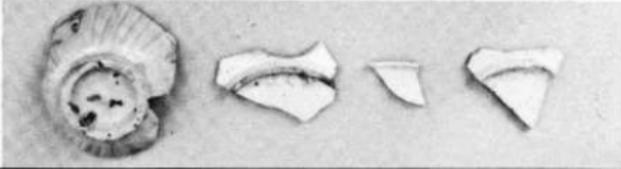
陶 器



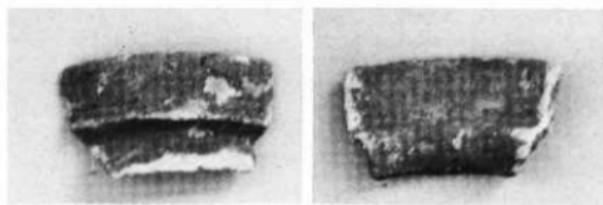
1 6 7
5 8 9 10



器



図版 X



土 師 器



煙 管

昭和58年3月22日発行

昭和57年度
宝満山地区県営公害防除特別土壌改良事業に伴う
戸波遺跡発掘調査報告書

編集行 八雲村教育委員会
印刷 黒潮社